

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	佐治 史
論文題目	タイの水辺公共空間の商業利用にみる共同性の形成 —ダムヌーンサドゥアック水上マーケットを事例に—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、タイの水辺の市場（水上マーケット）の形成過程およびそこで展開する商実践と社会関係を分析することで、水辺の公共空間の利用と管理をめぐる共同性の動態を明らかにする。水辺を誰がどのような権利と責任をもって管理してきたのかを、中部タイ・ラーチャブリー県に位置し、バンコクからの観光客を多く集めるダムヌーンサドゥアック（以下DS）水上マーケットを主たる事例として検討している。そこには、タイにおける水との関わりに根ざした社会的記憶とそれを利用した観光事業や水辺の集落における地域資源管理とが深く関わっている。構造化されにくいとされてきたタイ社会で、関係者の協力ゲームによって共同性が生まれ存続するメカニズムを詳細に分析している。</p> <p>第1章は序章として研究の目的や背景、先行研究を紹介し、本研究の問い、調査方法、論文の構成を提示する。調査の結果、現在タイ国内に水上マーケットが100ヶ所存在することを述べ、それらを類型化したリストを踏まえ、水上マーケットの研究が水辺の集落と水利組織、共同資源管理とタイの村落社会論研究に通じることを指摘する。非定型の水辺集落にあって、人々は空間への独自の認識を有し、それが生活や生業の場面で彼らの行動や社会関係を方向付けている可能性を指摘し、それ故に村単位ではなく、日常的な生活や商取引が展開される場に注目することを提唱する。また水辺の共同資源管理に関しては、村落共同体を基盤としない場でのコモنزの生成を論じた研究は限られており、水上マーケットにおける商業利用と共同性に焦点をあてることで、そのようなコモنزのあり方を提示すると述べる。先行研究としては、タイの村落社会論や、地域振興と観光開発、水利や灌漑組織に関わるもの、そして共同資源管理に関するものをレビューしている。</p> <p>第2章以降は、水辺の所有・利用・管理をめぐる権利主体と公共性の展開を論じる第1部と、そこで展開する商実践と共同性を論じる第2部という二部構成となる。第1部第2章では、国や地方行政、地方自治体の政策における運河や水資源政策の展開を、治水や産業、ダム開発や水運と地域経済文化の振興等について追う。続いてタイ国における観光政策の変遷を追い、その中で水上マーケットを位置づける。そして水上マーケットが特に観光資源化されてきた時期から、政府・企業・国民が協力し合い地域の文化活性化のためにこれを利用してきたことを通時的に分析する。そこで発信されたイメージや価値を具現化する形で水上マーケットが地域住民による地域文化の活性化や地域経済の発展という自発的な取り組みの流れと相俟って、全国的に増加し今も存続し続けている事を指摘する。</p> <p>第3章では、DS水上マーケットに目を転じ、地域社会における市場の役割や住民の経済活動の歴史とそれに伴う水上マーケットの変遷を明らかにする。マーケットの持続性の根</p>			

底には地域の生業としての商実践があり、地域内外の人々の働きかけで定期市から観光資源の水上マーケットに変貌したことが重要であった。観光資源化により陸上の市場とうまく差異化し共存して地域住民の生活の糧を得る場、地域経済の重要な柱として機能してきたことを指摘する。

第4章は、水上マーケットとその運河の運営組織について述べる。通常タイの運河は国家の公共財産であり自由使用が原則で、現行法制下では占用が認められる私有の運河は存在しないとされる。しかし本研究の主たる対象であるDS水上マーケットのトンケム運河は、沿岸の民有地の所有者がこれを公共に開いており、その歴史的な由来の故に、このような所有とその権限に基づく運営が認められている。こうしてプライベートな空間の中に、船着き場の社会集団を含む自由使用の公共空間の範囲が広げられてきた。タイ国内のより新しい水上マーケットの事例では、自治体の呼びかけによって共有地で始まったものや、僧侶の呼びかけによって寺院敷地で開始したものもあることを比較として提示する。

第2部第5章では、水上マーケットにて水上や水辺そして陸上で繰り広げられる商実践を詳述し分析する。土産物が中心の陸上店舗の主たる流通経路や売り方、商人同士の関係を論じる。続いて水辺や水上の主たる商実践を行う青果物商人の船主・船子との関係、水上空間の使い分け、権利義務関係や社会関係などを詳細に検討する。

第6章では、水辺の商実践を通じて生み出される利益がその後、売り手同士の社会関係の中で、頼母子講やくじ引きなど、商売とは別の交換形態による共同性を形成する営みを描出し、これを水辺の商実践と社会関係の文脈に位置付ける。商人たちはこれらの活動を通じて、社会関係を築きつつ競い合い、助け合う緩やかな共同性を形成していることを分析する。そして水上マーケットが、生活の糧となる収入源であると共に、良い取引との出会いや商いの競争などに従事する場を提供していることを明らかにしている。

第7章では各章のまとめの後に、中心的議論を提示する。DS水上マーケットでは、村落を基盤としない下からの資源管理のコモンズが生成し、そこに競争と共同の商実践が展開されることで水辺の共同性が形成されていることを明らかにし、それにより水上マーケットという従来のタイ村落社会研究に見られなかった共同性の形成事例を加えたとする。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、タイの観光地である水上マーケットを対象に、その形成過程において私的な所有に基づく空間であったものがいかに公共空間として利用されていくか、そこでどのような社会関係や共同性が醸成されているかを、丹念な資料の収集・分析に基づいて明らかにしている。

タイの農村研究は村落社会を所与の前提として類型に基づいて論じられてきたが、水上マーケットで生成する共同性を理解するにはそうした前提をおくことができない。一方、市場の研究は経済的な側面や商行為に特化し、その前提となる公共空間としての場に注目するものではなかった。運河や水路に形成される特異な場である水上マーケットの研究は、こうした従来の集落や市場調査では遂行しえないのである。佐治氏はそのような水上マーケットをめぐって、タイ観光局が刊行してきた20世紀初頭以来の年報や出版物、中央・地方の行政資料、法令、観光パンフレット、地図画像、歴史資料、新旧のタイ字新聞やSNS情報、研究報告、住民が撮影した写真等、様々な資料を渉猟している。そして全国の水上マーケットへの電話や現地踏査によるインタビューにより、まず全土で100ヶ所(実数)存在すると同定しそのリストを作成した上で、ダムヌーンサドゥアック(DS)水上マーケットを事例に選んだ。ここでは、住み込み長期滞在調査によって実施した売り子としての参与観察、商人の売上や商行為をめぐる数値的調査等多様な手法を駆使しており、本論文は合計28ヶ月に及ぶ徹底した調査に基づきタイの水上マーケットの全体像を明らかにする労作として資料的価値も大きい。

本論文の学術的貢献として以下の点があげられる。

第一に、近代観光産業とともに形を成し、タイらしさの見せ場ともされてきた水上マーケットという場について、政治・経済・社会の変遷に歴史的に位置づけて、その形成過程を詳細に追うことにより、これまで見えていなかったタイの社会史の一断面を描いていることである。水上マーケットの過去と現在は、運河・水資源政策の変遷、治水や産業、水運や灌漑事業の変遷、そして、コミュニティの経済振興や運河によるタイ発見のための観光や文化振興といった多局面の過程が収斂する場である。主たる対象となったDS水上マーケットの発端は、19世紀以来のチャオプラヤー・デルタ地域の開発と不可分であり、当時より移住してきた華人系住民にとって、水辺は今に至るまで重要な生活の場である。市場を訪れる外来者にとっては観光の場であるが、水路の両側に広がる果樹園や菜園がその形成を可能にしてきたことを、数量データも盛り込んで検証している。

第二に、水上マーケットの運営組織を詳細に追い、そこで生み出される特異な共同性を、詳細なデータの分析から明らかにしている。中でもタイ最古で最大のDS水上マーケットでは、本来民有地であるため水路の使用が水辺の土地所有者に任されている一方

で、そこに公共空間が形成され観光の場を提供する中で、舟子や商人が船着き場毎に組織され、その集合がマーケットを形作っている。そこでは共同資源管理と、それによって守られた場において展開する商実践による営利とが巧妙に組み合わせられた形が、住民主導で作られてきたことを明らかにし、また他地域の水上マーケットと比較することで、その成立の多様性を示している。

第三に、自ら土産物店の売り子として参与観察と日々の行動調査・売上調査を実施することを通じて、水上マーケットで展開される様々な商実践とそこで生じる相互関係を詳述し、頼母子講やくじ引きなど商人同士で実施される儲けの追求だけではない互酬性や相互扶助、そして日常的に商行為に従事することの競争性や楽しみについて活写している。それによって観光客に見せられる水辺の景観を持続させている人々の共同性の実態が浮き彫りにされている。

総じて本論文は、都市近郊で持続してきた水上マーケットの景観が、ウォーターフロント開発といった上からの事業ではなく、民有地の公共資源化や、個々人の日常の商実践とそこで生み出される共同性によって支えられていることを綿密な調査に基づいて明らかにし、また既存のタイの村落研究とは一線を画する集落形成の事例を豊富な資料とデータによって分析したオリジナリティの高い論文である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。